

---

# 序列最下位の精霊使い

機械 人形

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

序列最下位の精霊使い

### 【Nコード】

N7011Z

### 【作者名】

機械 人形

### 【あらすじ】

精霊と契約した者が通う学園は、序列争いの期間に入っていた。そんな中、序列最下位の如月雅は最下位だから闘わなくていいと戦闘放棄をしていた。すると、自分の契約精霊から「序列争いに参加しなければ契約破棄しますよ？」と脅され渋々参加する。「やるからには一位になろう！」「……最下位が一位を狙うとは下克上ですね」精霊バトル主人公最強ハーレム系ストーリーです！

## 第0話 プロローグ

契約精霊。

精霊とは自然界にある万物のおおもとになっていると考えられている魂であり、火、水、風、土、氷、星の六系統存在する。

その中でも星の系統は特殊で十二種類しかない。星の精霊の基本は黄道十二星座なので、その数と同じ十二体。

星の系統はそのこと以外詳しいことはわかっていない。

そしてその精霊たちは、人間と契約することによって契約精霊となる。契約する方法は、特に決められていない。戦闘でも話し合いでも。

契約精霊を使う者のことを『スピリチュアル・マスター精霊使い』と呼ぶ。

舞台は、精霊使いのみが通う学園、契精学園。由来は、契約精霊からきているらしい。

そして契精学園に通う序列最下位の生徒、きんげいみやび如月雅の物語が始まる。

## 第一話 精霊を持たない精霊使い

キーンコーンカーンコーン、と聞き慣れたチャイムの音がする。契精学園の二年四組に在籍している俺こと如月雅は、ダルそうに体を動かした。

契精学園は、高等部と中等部がある。ちなみに俺は高等部の一年生だ。

クラスは一から四までであり、成績が良い順番で分けられている。一組には良い方の生徒が、四組には悪い方の生徒が。

俺は四組に在籍しているが、勉強の成績が悪いわけではない。寧ろ一般よりはかなり良い方だ。

何故頭が良いのに四組に在籍しているかというところ……。

契約精霊が一体も使えない。それが理由だ。

火、水、風、氷、土。俺はその全系統の精霊と契約することができない。

普通なら五つの系統全ての精霊を体内にある魔力量分だけ契約できる。

高位の精霊は一体契約できるだけでも凄いとされている。逆に低位の精霊は複数契約しても魔力が余るだろう。

しかし、俺の場合は違う。子供の頃の記憶はほとんどないが、高位の精霊と契約した覚えはない。低位の精霊もまた然り。

契約すると体の何処かに現れる紋章も、俺の体には無い。学園長直々で調べたので確かだと言えよう。

学園長直々なのは、この学園の先生に男はいないからである。

元々精霊は女の形をしているので、精霊使いは女性の方が多い。

そして、学園の先生は必ず元精霊使いでないといけないので、必然的に女性の方が多くなる。

一応男性もいるのだが、力仕事の方が儲かるのであまりいない。

学園長はレアなのだ。

## 閑話休題。

話が逸れたが、ここまでくると残るは一つしかない。

元々体内の魔力が、低位の精霊とも契約することができないほど少なかった、ということになる。

しかし、それはおかしい。

魔力を持たない人間も多数存在するが、それでもやはりおかしいのだ。

この契精学園の入試内容は、近くにある霊力の高い森で精霊を一体契約すること。それは中等部からのエスカレーターでも変わらない。契約できなければ絶対合格できないはずなのだ。

つまり、俺は入試を何らかの方法で通過した、ということ。

まあ、所謂ズルをしたのだ。

正確に言えば、延期ということになっている。なので俺は、在学中に最低でも一体の精霊と契約して、精霊使いにならなければいけない。

他の生徒たちには、ズルをしていることをバレないようにするために学園長に頼んだ。

内容は、如月雅は魔力量が多いのに精霊との契約が上手くいかないので契約を延期している、とのことを。

実際この嘘をみんなが信じてくれて、俺は序列最下位に甘んじている。序列争いに参加しないでいいので悪い気はしない。

しかし、中には異常な程俺に精霊と契約させようとしているやつもいる。

「おい、如月雅。今日こそは精霊と契約してもらおうぞ」

放課後になると何時ものように一人の女の子が俺の席に来た。

彼女の名前は水<sup>みず</sup>和<sup>わ</sup>椎<sup>しい</sup>名<sup>な</sup>。顔は文句無し美人で長い赤髪も綺麗だが、男勝りな口調がちょっと勿体無い。名前に入っている『水』系統の高位精霊を使う。

序列は四位で一組の生徒だ。態々何時も俺がいる一番遠いクラスへまで来るなんてご苦労なこった。

何でかはわからないが、やたらと俺を精霊使いにさせようとしてくる。

「今日はパスで」

「さあ、早く行くぞ。ユウラ、水牢に入れて連れていくぞ」

「椎名様、無理矢理はあまり良くありませんよ」

「……………」

俺の発言は聞き入れてもらえないらしい。

まあ、今日は無駄な抵抗をせず水和さんの言いなりになっておこう。行きたいところも丁度そこだし。

あまり刺激すると水和さんの水系統の精霊、ユウラに水牢という水の牢獄に入れられてしまう。

「自分で歩くから大丈夫だよ」

「お前は信用ならん。何回あの森に連れていったと思っている。それなのに未だにお前は精霊と契約できていない！」

水和さんの長い説教が始まりそうだ。

おっと、まだここは教室だったな。

今説教されたら俺は面目が更に悪くなってしまふ。序列最下位つてことでも悪いのに。

ユウラとアイコンタクトを交わして、説教をしている水和さんを二人で教室の外へ。

「なっ、ちよっ、待て！ 私を押すなー！」

駄々を捏ねる水和さんをスルーして、そのまま近くにある霊力の高い森『ハイスピリット・フォレスト 霊高の森』に向かう。これじゃあ、どっちが連れていかれているのかわからないな。

「も、もう着いただろう！ は、離せ！ 触れるな！」

酷いことを言うなー、水和さんは。心が痛むぞ。

「と、とにかく早く精霊と契約してこい！」

急かす水和さんを後目に、俺は今まで行かなかった奥の洞窟に向かった。

昨日見付けたのだが、日が暮れかけていたので今日にすることに

していた。普段は乗り気じゃない俺が抵抗もしないでここに来たのは、この洞窟を調べたかったからだ。

「結界……？ ああ、ユウラの特大水牢か」

洞窟を少し進むと、水でできた透明の通れない壁が見えてきた。

これは俺に使おうとしていた水でできた牢獄。水牢だ。

ユウラの得意技で、使用範囲から出られなくなる技。ユウラが高位精霊なのも、この技を見れば納得できる。

言わば最強の結界。これから出られる精霊や精霊使いはそうそういないだろう。

推測だが、水和さんはこの結界に入ったユウラ以下の位の精霊を自力で俺に取らせようとしている。

……無理だろ。

完全にやる気が無くなった俺は、来た道を引き返そうとしたが不可解な箇所を見つけ、足を止めた。

「水牢が……破られてる」

数メートル離れた水牢の部分。そこに人一人分すっぽり入りそうな穴が空いていた。

何者かに破られたように見える。しかし、さっき言ったようにユウラ以下の位の精霊は通れないようになっていて、入試でもないこの時期に序列三位以上の人が来ることも殆んどないだろう。

つまり、あの水牢が破れている場所を通って行けば高位の精霊に会えるかもしれない。

俺は帰るために向けていた足を再び水牢へ向け、水牢にできた穴に入った。

好奇心は時に良い結果をもたらす。実にそうであってほしい。

## 第一話 精霊を持たない精霊使い（後書き）

次話で新しい精霊とバトル展開になる予定です。

プロフィールでお気に入り登録してくださった方、一話で幻滅させてしまったら申し訳ない。

みなさんありがとうございます。

機械 人形より



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7011z/>

---

序列最下位の精霊使い

2011年12月24日23時50分発行